

虹の架橋



今月の題字 田端啓子さん

(みどり市東町)

毎日、富弘美術館の周辺を愛犬と一緒に散歩している田端さんは、美術館のサポーターとしても活躍。富弘美術館は多くの地域の人たちに支えられています。

錦秋のながめ公園で 第六十五回『関東菊花大会』

今、ながめ公園で関東菊花大会が開催されています。今年の菊人形のテーマは『鎌倉殿の十三人』。六十年以上前からながめの菊人形を作り続けてきた本庄市の菊師・松崎福治さんの息子さんと娘さんが先代の技と心を受け継ぎ、伝統の菊人形を作り上げました。ご来場の際は、一年かけて菊を育てた人たちが菊人形をつくった人



たちの努力を感じたいと思います。公園内の「ながめ余興場」では「菊花寄席」を開催中。一部(十二時半)、二部(十四時)の二回公演で、初日の古今亭始、三遊亭鯛好、春雨や晴太さんから、最終日の古今亭志ん松、三遊亭好二郎、春風亭かけ橋さんまで、毎回三人、八日間二十四人の若手噺家さんが出演。ながめ公園の入場料だけで菊花寄席は入場無料です。将来有望な人気噺家さんたちの話芸をお楽しみ下さい。

ながめ公園で『関東菊花大会』
開催中 11月23日(水)まで
9時~16時(最終入園は15時半)
一般400円 小・中学生200円
期間中の菊花寄席は、11月3(木・祝)、5(土)、6(日)、12(土)、13(日)、19(土)、20(日)、23(水・祝) *寄席は入場無料



小耳にはさんだ
いい話
(文責・靖)
《327》

郷土の偉人・吉村屋幸兵衛

「三方良し」の会の定例会議で会員の須永孝治さんから『吉村屋幸兵衛関係書簡』(横浜開港資料館発行)という分厚い本をお借りしました。須永さんのお父さんの重雄さんは郷土史家として貴重な郷土資料を収集し、ご先祖は吉村屋幸兵衛とも交流がありました。吉村屋幸兵衛(天保七年〜明治四十年)は、十七歳で大間々の二丁目で糸繭商を始め、安政六年、横浜開港と同時に横浜に店を移し、またたく間に商才を発揮して「横浜の三巨頭」と呼ばれるほど

の生糸貿易商になりました。慶応四年、明治元年には売上げが百万両を超えていたという記録が残っています。明治政府は生糸貿易を發展させるために明治二年に横浜為替会社を設立し、吉村屋幸兵衛が頭取に任命されました。さらに、翌年には大蔵省の金融制度視察団の一員として、伊藤博文らと共にアメリカ合衆国を訪問しています。帰国後は明治五年に設置された第二国立銀行の設立にも大株主として参画して活躍しました。明治十一年、幸兵衛は吉村屋の営業権を渋沢喜作(渋沢栄一の従兄)に譲渡して引退隠居しています。幸兵衛四十三歳の時でした。

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の絵《327》

大野勝彦さん『出逢いに感謝』



熊本県在住の義手の詩画家作家・大野勝彦さんが今年も『大野勝彦色紙カレンダー』を作りました。一月のカレンダーには「出逢いに感謝 あなたのこと思っただけで笑顔です 頑張ります」、十二月は「今のうち 自分で動ける今のうち おいしく食べられる今のうち あなたが元気でいてくれる今のうち 人のお役に立てる今のうち 今のうち 今のうち ありがとうが言えるあなたがいてくれる今のうち」という言葉が素敵な絵に添えられています。来年も大野さんの言葉と共に一年を過ごしたいと思えます。(税込千五百円)

靖ちゃん日記

令和四年十月十四日(木)
宮城県多賀城市の親友、小畑貞雄さんが訪ねて来てくれた。ピカピカに磨かれた真鍮の愛車も五時間運転してきた小畑さんは、「みどり市」のピンクの刺繍入りのポロシャツを着てきた。小畑さんは東日本大震災の津波で家が流されたが、避難所の汚れたトイレを一日も欠かさず磨き続けていたスゴイ人。虹の架橋でOKバジを知った小畑さんは、ネパールへの支援も続け、十月九日にはネパールの村に「小畑子ども図書館」を誕生させた。今日、小畑さんから「本を揃えるためにOKバジに送ってほしい」と、また現金を預かった。六十歳から多賀城市役所で市長の選挙手をしている小畑さんは「人を喜ばせるためにお金と時間を使うのが好きなんだ」と思った。小畑さんが丹精込めて作ったサツマイモむらったの掃除仲間にも配ることにした。
小畑さんのイモは、有り難すぎて整々しく、へもできずない。



『吉村屋幸兵衛関係書簡』の中に、幸兵衛が大間々にいた頃は吉田孝三郎と名乗っていたという記述があり、ずっと疑問に思っていた謎が解けました。それは、毎年大間々祇園祭で使っている大太鼓の寄進者の最初に書かれている吉田孝三郎なる人物は誰なのかという疑問でした。大太鼓の胴には「政四年巳年吉田孝三郎 須永惣右衛門 金子平右衛門 佐藤六左衛門 長澤小兵衛 二丁目若者」と彫られています。須永、金子、佐藤は戦国末期に大間々を開いた



「大間々六人衆」の子孫で、長澤小兵衛も町の歴史に貢献した人物でした。吉田孝三郎が吉村屋幸兵衛だと解ったことで、この太鼓が文政四年ではなく安政四年だったと解りました。太鼓が寄進された百六十五年、幸兵衛は二十三歳の若者でした。大間々祇園祭はあと七年で四百年を迎えます。私たちの先祖が代々大切にしてきた祭りをしっかりと後世に継承したいと思えます。

我が家の庭の柿の老木は、六十年以上も甘い実をつけてきました。数年前から実が少なくなり、今年も十個足らずの実が全て鳥のご馳走になってしまいました。それでも柿の葉っぱは例年と同じように落ち、毎朝の落葉掃除が愛妻の余分な大仕事になっています。
昨日までの落葉が掃き清められた庭はとても気持ちの良いもの。ほうきで掃き目が五線譜のように残り、その上に落葉が音符のように落ちると秋の歌が聞こえてくるようです。でも、毎朝掃除をしている者にとってはそんな悠長な心境にはなれないかもしれません。

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十八号は令和四年十二月一日(木)発行予定です。

やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん